

不自讚毀他戒

五泉市 永谷寺 吉原東玄
加茂法話会八月二十六日(月)

第七不自讚毀他戒（『梵網菩薩戒經』参究：十重禁戒7）

一般的に「不自讚毀他戒」といわれる戒文の話になるのですが、道元禪師の『仏祖正伝菩薩戒教授戒文』ではこれを「不讚毀自他戒」としています。前者は、「自らを讚（たた）え他を毀（そし）らざる戒」ということです。後者は、「自他を讚えも毀りもせざる戒」ということです。前者には、まだ「自他」「讚毀」という対立事項が残り続けています。後者は、その一体を前提にしなから、更に一体の道理を超えていこうとする思想的力動性が見えます。

「礼拝偈」に「能礼所礼性空寂 自身他身体無二 願共衆生得解脱 発無上意 眞際」(へのうらいしよらいしよくうじやく じしんたしんたいむす) が、ぐしゆじよとくげだつ ほつむじよいきしんさい)とあります。能礼とは礼拝する人のことで、所礼とはお拝を受ける人のことです。所礼とは仏さまの場合もあり、師匠や先生などいろいろあります。礼拝する人とお拝を受ける仏さまとが継ぎ目なしになるところの礼拝のことで、宗門の礼拝は自身(仏)が自身(仏)に対して礼拝するのです。自他のへだてなく仏行としての礼拝ですから、拝む方と拝まれる方を見ておつたら駄目なのです。そして、願わくは衆生と共に解脱を得て、無上菩提を求め、心をこして眞如法界に帰入せんことを願うのです。何かの加護を求むるの礼拝でなく、無心の礼拝行であるから、仏行であり陀羅尼であるということになります。

「私は欲望そのものが悪いといっているので決してありません。欲望も生命力であり、欲望があつてこそ成長もし、向上も進歩もあるのです。しかしこの欲望にブレーキをかけて、その力も生命力としてあるはずで、欲望というアクセルだけ発達させて、それを抑制するブレーキが未発達なのは、社会としてもたいへん危険なことであり、当人自身としてもまったく不幸なことだといいたいのです。」

内山興正 著「ともに育つころ」小学館